

英国ナショナルカリキュラム2013年版における 音楽科の創作領域の扱いについて

松 永 洋 介¹

1 問題の所在と研究の目的

本研究の目的は、英国ナショナルカリキュラム（National Curriculum, 以下NCと表記）における音楽科カリキュラムの変遷を創作領域に焦点をあてて考察することにある。

英国では音楽科カリキュラムは、「National Curriculum」の中の「Music」に示されている。英国で初めて国家としての統一カリキュラムが作られたのは1992年である。その後1995年、1999年の改訂を経て現在に至っている（本稿ではそれぞれ第1次NC、第2次NC、第3次NCと表記する）。日本の学習指導要領では「創作」（小学校においては「音楽づくり」）は音楽における表現分野の一領域として位置付けている。同様に、英国においても創作は「Music」の一領域として位置付けられ、「composing skills」（作曲技能）と表記される。

筆者はすでに「音楽科カリキュラムにおける創作領域の変遷についての日英比較」の中で、1992年から1999年まで3回にわたって発表されたNCにおける創作領域についての変遷を報告した²。その後2013年9月に新しいNCが発表された。これは1999年に第3次NCが示されて以来14年ぶりの改訂となる（これを第4次NCと表記する）。ところが、第4次NCは第3次までのカリキュラムと大きく異なり、かなり簡略された形で発表された。粗く言えば、まずページ数が激減し、キーステージ1と2を合わせて2ページしかない。またキーステージ3も2ページであった。それに伴い、学習内容も大きく方向性を示すのみで、従来のように例示は示されなくなった。

そこで本稿では、新しく示された第4次のNCを含め、改めて第1次から第4次までの変遷を創作領域に焦点をあてて考察する。その上でNCにおける創作の意義について考察を加えることを目的とした。

2 研究の方法

方法は文献的研究を中心とする。対象とするのは英国（連合王国）を構成するイングランドのカリキュラムである。第1次から第4次までのNCがその対象となる。第1次から第3次まではインターネットで入手したものと、HMSO³から出版されたものと両方を用いる。両者は全く同一である。第4次NCは教育省（Department for Education, 以下DfEと表記）がインターネットで公開しているものを使用した⁴。

分析の手法はまず第1次から第3時までのNCにおける「目的」「内容」「到達目標」の変遷を比較する。そして今回示された第4次NCと比較し、創作領域がどのように変化してきたのかを考察する。

1 岐阜大学教育学部音楽教育講座

2 松永洋介、「音楽科カリキュラムにおける創作領域の変遷についての日英比較」日本学校音楽教育実践学会第16回全国大会（花園大学、平成23年8月20日）における自由研究発表、及び、松永洋介（2012）、「音楽科カリキュラムにおける創作領域の変遷についての日英比較」、『学校音楽教育研究』、日本学校音楽教育実践学会、pp.122-123

3 HMSOはHer [His] Majesty's Stationery Officeの略。（英国の）用度局と訳される

4 「National curriculum in England: music programmes of study」, (2011.8.14アクセス確認)

<https://www.gov.uk/government/publications/national-curriculum-in-england-music-programmes-of-study>

3 英国のナショナルカリキュラム (イングランド)

(1) 歴史

英国では、教師の教育の自由が伝統的に確立されており、各学校の教育内容は学校や教師の裁量に任されていた。しかし1988年に当時のサッチャー首相とベイカー教育科学相は、学力低下の立て直しを目的として「教育改革法」を成立させた。このことによって、教育内容に中央当局である教育科学省(当時)が関与を強化し、教育内容の水準の確保と統合性、地方ごとの不均衡の是正を目的として全国標準カリキュラムの導入を決定した。これがNCである⁵。導入当初はイングランドとウェールズのみで実施されたが、現在では英国(連合王国, United Kingdom)を構成する4カ国(前期に加え、スコットランド, 北アイルランド)のそれぞれが独自のカリキュラムを定めている⁶。

英国では省庁再編がたびたび行われる。1999年版のNC作成に関わったのは教育雇用省(DfEE: Department for Education and Employment)であった。しかし省庁再編によって、2001年から2007年までは教育技術省(DfES: Department for Education and Skills)となり、現在は教育省(DfE: Department for Education)が教育行政を行っている。また、2011年まではイングランドでカリキュラムを作成していたのはQCDA(Qualifications and Curriculum Development Agency: 資格カリキュラム開発機構)と呼ばれる組織であった。これは日本の独立行政法人にあたる組織で、NCは教育雇用省(DfEE: Department for Education and Employment, 現在の教育省)の委託を受けて作成されたものである。しかし政権交代によってQCDAは廃止され、業務自体はOfqual(Office of the Qualifications and Examinations Regulator: 資格・試験監査機関)やSTA(Standards and Testing Agency)等に引き継がれた。

英国は複線型の学校制度であるが、義務教育は5歳から16歳までの11年間となっている。一般的な就学形態は、初等学校(primary school) 6年(5~11歳)、総合制中等学校(comprehensive school) 5年(11歳~16歳)となっている。大学進学希望者は一般的には、さらにシックスフォームと呼ばれる2年間の課程へ進む。

NCでは、学習内容は複数学年をまとめたキーステージ(Key Stage)ごとに示されている。キーステージには4つの段階があり、キーステージ1は5~7歳、キーステージ2は7~11歳、キーステージ3は11~14歳、キーステージ4は14~16歳となっている。つまり、初等学校と中等学校をそれぞれ2つずつに分け、前期初等教育、後期初等教育というように4つの教育段階を作っているといえる。このうち、音楽はキーステージ3までが必修科目となっており、キーステージ4からは選択科目となる。なお、NCの音楽には、キーステージ4の記述がない。これはキーステージ4からはGCSE⁷のプログラムによって授業が行われるからである。

(2) 構成

英国の音楽科のカリキュラムにおける領域は次の通りである。

第1次(1992年) 「演奏(Performing)」, 「作曲(Composing)」, 「聴取(Listening)」, 「批評

5 岩橋法雄(1991), 「イギリス教育政治におけるサッチャーの『遺産』(上)」, 『教育』第538号, 国土社, p.101

6 塩原麻里, 高須一(2003), 「イギリス」, 『音楽のカリキュラムの改善に関する研究-諸外国の動向-』, 国立教育政策研究所。これはNC1999年版を邦訳したものである。なおインターネットからも入手可能である。

http://www.nier.go.jp/kiso/kyouka/PDF/report_15.pdf

本文(英文)は, http://curriculum.qcda.gov.uk/uploads/Music%201999%20programme%20of%20study_tcm8-12060.pdf に掲載(2011.8.14)。イングランド以外の3国は, 次のサイトより入手可能(2011.8.14)。

<http://www.nicurriculum.org.uk/> (北アイルランド)

http://wales.gov.uk/dcels/publications/curriculum_and_assessment/arevisedcurriculumforwales/nationalcurriculum/musicnc/musiceng.pdf?lang=en (ウェールズ),

<http://www.ltscotland.org.uk/curriculumforexcellence/expressivearts/index.asp> (スコットランド)

7 GCSE(General Certificate of Secondary Education), 一般的には中等教育修了試験と訳されるが, 教育省はGCSEを, 「中等教育一般修了証。14歳から16歳の生徒によって履修された複数科目におけるアカデミックな資格。それらは中等教育の終了時において生徒の達成度を評価する主な手段である」と規定している。

<http://www.education.gov.uk/help/atozandglossary/g> (2011.8.14)

(Appraising)」これらを「演奏と作曲 (Performing and Composing)」と「聴取と批評 (Listening and Appraising)」の2領域にまとめて示している。

第2次 (1995年) 「演奏 (Performing)」, 「作曲 (Composing)」, 「聴取 (Listening)」, 「批評 (Appraising)」1992年版と同様に「演奏と作曲 (Performing and Composing)」と「聴取と批評 (Listening and Appraising)」の2つの領域にまとめて示している。

第3次 (1999年) 「知識, 技能, 理解 (Knowledge, skills and understanding)」, 「発展 (Breath of study)」, 「知識, 技能, 理解」はさらに4つの分野に分けられ, 「演奏技能 (Performing skills)」, 「作曲技能 (Composing skills)」, 「批評 (Appraising)」, 「聴取, 知識と理解の応用 (Listening, and applying knowledge and understanding)」からなる。

第4次 (2013年) 第3次までのような明確な領域は示されていない。

4 第1次NCから第3次NCまでの変化について

第1次NCから第3次NCまでのNCにおける大きな変化は次の2つである。

(1) 第3次NCからは領域の枠組みが大きく変わったこと。

第1次と第2次では, 「演奏 (Performing)」, 「作曲 (Composing)」, 「聴取 (Listening)」, 「批評 (Appraising)」の4分野を「演奏と作曲」と「聴取と批評」の2つの領域にまとめて示していた。しかし, 第3次からは大きく枠組みが変わり, 「知識, 技能, 理解」と「発展」の2つとなった。そして「知識, 技能, 理解」の中に「演奏技能」, 「作曲技能」, 「批評」, 「聴取, 知識と理解の応用」の4分野が含まれるようになった。

(2) 第3次からは到達目標 (Attainment Target) の示し方に幅を持たせたこと。

NCでは, 日本の学習指導要領のような目標は定められていない。それに代わって示されているものが到達目標である。

第1次NCでは, キーステージごとに「演奏と作曲」と「聴取と批評」の2領域に分けて指導内容を示していた。その項目は「キーステージ終了期における期待される技能 (End of Key Stage Statements)」, 「学習プログラム (Programme of Study)」, 「実例 (Examples)」の3つであり, 項目ごとに対応して示されていた。例えばキーステージ1における創作分野は表1のように示されている。

つまり, 最初に到達目標を示し, その目標を達成するために, 各目標に学習プログラムを対応させて示し, 具体的な活動例を示すという形をとっている。

表1 1992年版NCのキーステージ1における創作分野の記載例

キーステージ1 到達目標1: 演奏と作曲 (一部抜粋)

キーステージ終了期における期待される技能	学習プログラム	実例
キーステージ1の終わりには, 生徒たちは以下のことができるようになるべきである c) 簡単な作曲をするために, 音を探し, 選び, つなぐ。	生徒たちは次のようにするべきである。 viii) 自分たちの声, 体, 環境や調律楽器, 非調律楽器からの音を含む音源の範囲を探究し用いる。 ix) 異なった刺激に答えて音をつくり, 遊び, 組織する。	生徒たちは次のようなことができる。 ・ 教室内楽器によってつくられた音を探究し, それぞれが作ることでできた全く違った音がいくつかできたかを発見する。 ・ 声がつくることのできる音を探究する。 ・ 異なったエピソードを描写する異なったグループで, お話を音で述べる。

第2次NCにおいても、キーステージごとに「演奏と作曲」と「聴取と批評」の2領域について示しているのは第1次と同じである。しかし、出版された印刷物では、学習プログラムと到達目標の2つの部分に分かれ、それぞれにキーステージ1から3までの具体的な内容が示されている。

各キーステージにおいて学習プログラムは項目1から項目6までの6項目からなっている。このうち項目1から項目3までは「演奏と作曲」と「聴取と批評」の両方に共通する事項である。また、項目4と項目5は「演奏と作曲」と「聴取と批評」とに分かれて示されている。項目1は、学習形態とICTの使用について述べている。項目2は、指導されるべき音楽的要素（音程、音高、強弱など）について示している。項目3は学習で用いるべき楽曲の選択の範囲について示している（詳細を巻末に資料として掲載した）。

項目4と項目5は連動している。例えばキーステージ1における創作分野は表2のように表記されている。

表2 1995年版NCのキーステージ1における創作分野の記載例
〔演奏と作曲〕

4 児童は次のような機会を与えられるべきである	5 児童は次のことを教えられるべきである。
c いろいろな刺激に反応して作曲し、能力の幅を広げる。 例えば、声、楽器、環境音 d 友達と音楽的なアイデアを交流する。	e 音楽的なパターンを即興する。例えば、遊んだり歌ったりしながらパターンを変える。 f 簡単な構造の音を探究し、創造し、選択し、組織化する。 g 音楽的な効果を創造するために音を用いる、例えば機械を想像させたり森の中を歩いたりしているように。 h 適切なところで、記号を用いて作曲したものを記録する。

また、到達目標はキーステージ3まで示された後に、各キーステージのものが示されている。なお、キーステージ3の到達目標の後には「例外的な演奏 (Exceptional Performance)」として「演奏と作曲」と「聴取と批評」の各領域ごとにその内容が示されている。

以上述べてきたように、第1次と第2次については、それぞれのキーステージごとに到達目標が定められている。

一方第3次NCでは、各キーステージの到達目標は示されず、キーステージ1から3までをまとめて、8つのレベル (Level) に分けて示している。それはレベル1からレベル8となっており、レベル8の上には、さらに才能のある子どものための「発展的レベル (Exceptional performance)」が設定されている。

教師は各キーステージの終わりに評価をする。これは成績評価である。その方法は、まず教師は生徒の学習活動を観察したりワークシートを用いたりして、その生徒の音楽学習の様子を授業ごとに記録している。そして各キーステージの終了時に、その生徒の学習状況が達成目標のどのレベルに当てはまるかを総合的に判断し、生徒に該当するレベル (例えば「あなたはレベル3です」というように) と文章による所見を通知する。

到達目標はキーステージ1の場合、レベル1から3のいずれかとなっている。そのうち、標準的な到達目標はレベル2とされている。つまり、到達目標は1つのキーステージに1つの到達目標が対応しているのではなく、複数の到達目標が存在し、その中に最も標準的なレベルが設定されていることになる。同様にキーステージ2では到達目標はレベル2～5であり、望ましい到達目標はレベル4である。また、キーステージ3ではレベル3～7で、望ましい到達目標は、レベル5または6となっている。つまり第3次では1つのキーステージに1つの到達目標が対応するという形ではなく、1つのキーステージに対して複数の到達目標を設定している点で第2次までの到達目標との違いがある。

NCでは日本の学習指導要領に示されているような目標はなく、実質的には到達目標が日本でいう「各学年の目標」にあたる。しかし、同一学年の全員が同じレベルに到達することを期待するのでは

なく、個々に合わせた到達目標となっている点が特色である。また、到達目標は1年間の授業を通して最終的な評価として判定されるものでもある。

(3) 創作領域の変遷

①目標について

NCでは、日本の学習指導要領に示されているような各学年別の目標が示されていないため、ここでは到達目標に示された創作領域にかかわる内容についての変遷を考察する。

第1次NCでは、到達目標は2つの視点から設定されている。一つは創作活動の内容であり、もう一つは記譜やコミュニケーションに関する内容である。例えばキーステージ1では、前者については「c)簡単な作曲をするために、音を探し、選び、つなぐ」、後者については「d)生徒自身が作曲したものを記録し、互いに話し合う」と示されている。つまり、ここに示されていることができていれば「A」と判定されるのである。

第2次NCでは創作領域の到達目標は、キーステージ1では創作活動の内容についてのみ示し、キーステージ2からは、第1次NCと同様、記譜法を加えた2本立てとなっている。例えば、キーステージ1の到達目標は、「児童は音を探究し、選択し、秩序づける。単純な構造をもった曲を作曲し、強弱と音色を含めた音楽的要素のいくつかを用いて表現豊かにする」というように、児童が作った作品についての記録する方法は示されていない。しかし記譜については、具体的な活動の中で示されているため、全く軽視されているわけではない。

第3次NCにおいても、到達目標は創作活動の具体的な内容を示すものとなっている。例えばキーステージ1に対応する到達目標は3つある。レベル1は「生徒はあらかじめきっかけとして与えられたアイデアへ応答する形で、短いリズムや旋律のパターンを反復し、音をつくったり選んだりする」、レベル2は「あらかじめきっかけとして与えられたアイデアへ応答する形で、音を注意深く選択しながら、それらを初め、中、終わりという簡単な構造にまとめる」、レベル3は「生徒は繰り返しのパターンを即興する。そして音が組み合わされる効果を意識しながらいくつかの音を重ね合わせる」となっている。

②内容について

1) 第1次(1992年) NC

第1次NCでは、まず身の回りの音に着目させ、探究活動を通して音を音楽にしていくという方法が採られている。次にキーステージごとの変化を示す。

キーステージ1 簡単な作曲をするために、音を探し、選び、つなぐ

キーステージ2 簡単な構造をもった音楽的なアイデアを考え、発展させる

キーステージ3 音楽的構造をもった考えを発展させて、音楽を作曲し、編曲し、即興する。

最終的には一定のまとまりをもった楽曲として成立させることを期待しつつも、音楽的なアイデアに基づく創作活動を重視していると考えられる。

また、コミュニケーションの面では次のように変化している。

キーステージ1 生徒自身が作曲したものを記録し、互いに話し合う

キーステージ2 音楽的アイデアを友達と話し合い、記譜法を用いて作曲したものを記録する。

キーステージ3 作曲したものを修正し、後続の演奏のためにそれらを適切に記譜する。

ここでは、児童の作品を視覚化し、友達と話し合いながら作品を完成へと近づける手段として記譜が用いられているといえる。

2) 第2次(1995年) NC

第2次NCでは、各キーステージで扱われるべき音楽的要素が全分野に共通して示されている。

例えばキーステージ1では「音程」、「持続」、「強弱」、「速さ」、「音色」、「テクスチャ」が詳しい内容とともに示されている。そしてこれらの諸要素をふくめて「構造」が扱われている。これは現

在の日本で実施されている第8次指導要領の〔共通事項〕にあたると考えられる。これらをもとに各領域の学習が行われる。

創作分野では、キーステージ1から3まで共通して「いろいろな刺激に反応して作曲し、能力の幅を広げる。例えば、声、楽器、環境音」と「友達と音楽的なアイデアを交流する」の2つが学習プログラムとして挙げられている。そしてそれぞれについて2つずつ具体的な活動が示されている。前者の場合、即興表現をすることと、音楽の構造を意識することとの2つの面からなっている。以下、表3に各キーステージの学習プログラムと到達目標とを対応させた表を示す。なお、それぞれの項目は創作分野のみを抜粋して示したものである。

表3 第2次NCにおける学習プログラムと到達目標との対照表（創作分野一部抜粋）

KS	学習プログラム (Programme of study)	到達目標 (Attainment Target)
1	音楽的なパターンを即興する。例えば、遊んだり歌ったりしながらパターンを変える。 簡単な構造の音を探究し、創造し、選択し、組織化する	児童は音を探究し、選択し、秩序づける。単純な構造をもった曲を作曲し、強弱と音色を含めた音楽的要素のいくつかを用いて表現豊かにする。
2	リズム的な、旋律的なアイデアを即興する。例えば打楽器パートに歌を加える。 音楽的な構造をもった音を探究し、創造し、選択し、結合させ、組織化する。例えば繰り返される部分、節、合唱	児童は適切な素材を選択し、結合する。音楽的な構造を用いる。音楽的要素と用いて表情豊かにする。そして計画された効果を達成する。
3	様々な様式で即興したり編曲したりする。 素材を選択し、結合させる。そして音楽的な構造をもった音楽的なアイデアに発展させる。	児童は音楽的なアイデアを構造の中で発展させる。ハーモニーを含めた異なったテクスチャを用いる。そして音楽的要素や様々な素材を利用する。

上の表に示した学習プログラムは上段が即興表現に関わる内容、下段が音楽の構造に関わる内容である。キーステージ1では断片的だった音楽的アイデアが、キーステージが上がるにつれて次第に長くなっていき、最終的には音楽的な構造が明確な作品として成立することが期待されていると考えられる。

3) 第3次 (1999年版) NC

第3次NCでは、表4に示すように、各キーステージ終了時に期待される到達目標は複数存在する。したがって、評価は「A」などの分類によるのではなく、「レベル3」というように段階で示される。

表4 第3次NCにおける学習プログラムと到達目標との対照表（創作分野）

KS	学習プログラム (Programme of study)	対応	Level	到達目標 (Attainment Target)
1	a 音楽的なパターンをつくる方法。 b 音や音楽的なアイデアを探究したり、選択したり、まとめたりする方法。		1	生徒はあらかじめきっかけとして与えられたアイデアへ応答する形で、短いリズムや旋律のパターンを反復し、音をつくったり選んだりする。
2	a 演奏の際に、旋律的でリズム的な素材を即興し、発展させる方法。 b 音楽的な構造の中で、音楽的なアイデアを探究し、選択し、結合し、組織化する方法。		2	あらかじめきっかけとして与えられたアイデアへ応答する形で、音を注意深く選択しながら、それらを初め、中、終わりという簡単な構造にまとめる。
3	a 演奏する際に、音楽的アイデアを即興し、探究し、発展させる方法。 b 音楽的な構造や、あらかじめ与えられたジャンル、様式、伝統を含む素材を選択したり、結合させたりして、音楽的アイデアをつくり、発展させ、拡大する方法。		3	生徒は繰り返しのパターンを即興する。そして音が組み合わせられる効果を意識しながらいくつかの音を重ね合わせる。

第1次及び第2次NCでは、指導事例が紹介されていたが、第3次ではほとんど紹介されていない。それだけ教師の裁量に任される部分が多くなったともいえる。

学習プログラムにおいて、「a」は、即興表現に関わる内容が示されている。また「b」は音楽の構造に関わる内容である。双方ともに探究活動を重視していることが共通点としてあげられる。「a」と「b」はどちらも「音楽的なアイデア」がキーワードになっていると考えられるが、カテゴリーとして区別するのであれば「a」は即興という活動そのものが重視され、「b」では音を音楽へと組織し、さらにまとまった作品として完成させていくための気づきや知識が重視されているのではないかと推測される。

一方、到達目標はキーステージ1の場合レベル1から3までの3つのどれかに判定される。しかし、レベルが上がるにつれて、音楽の構造としては複雑化していく。例えばレベル1では「短いリズムや旋律のパターンを反復し、音をつくったり選んだり」すればよいのであるが、レベル2では「音を注意深く選択しながら、それらを初め、中、終わりという簡単な構造にまとめる」というように、創作の意図が一步踏み込んだものとなっている。さらにレベル3では「音が組み合わされる効果を意識しながらいくつかの音を重ね合わせる」というように、単旋律から複旋律へと進んでいる。つまり、到達目標のレベルが上がるにつれて、期待される姿は高度なものとなっている。

5 第4次NCについて

(1) 第4次NCの概要

第4次NCは2013年9月11日に出版された。DfEの通知によれば、2014年9月より実施することが求められている⁸。

インターネットではDfEが「Statutory guidance」として「National curriculum in England: framework for key stages 1 to 4」を2014年6月16日にアップしている⁹。そのなかの7項目目に「Programmes of study and attainment targets」があり、ここから各教科にアクセスすることによってそれぞれの「Programmes of study and attainment targets」を入手できるようになっている。

音楽は、「Statutory guidance National curriculum in England: music programmes of study」としてHTML版、PDF版、Word版のいずれかで入手可能である。

しかし、前述したようにキーステージ1と2を合わせて2ページ（表紙を除く）、キーステージ3も2ページしかない。また第3次まではLevel1からLevel8まで示されていた「Attainment Target（到達目標）」は、それぞれ2行ずつで示されているのみで、従来のような詳細な記述は見つけることができなかった。

第4次NCの特徴は、まず「Purpose of Study（音楽科の学習目標）」が示され、次いで「Aims（目的）」が示されるようになったことである。これは第3次NCまでには見られなかったものである。さらにそれに続いて「Attainment Target（到達目標）」が示されている。「Attainment Target」自体は第3次までにも示されていたが、2行でキーステージ1とキーステージ2を一緒にして示している。ここまでが1ページに収められている。

2ページ目は「Subject content（教科内容）」としてキーステージ1とキーステージ2のそれぞれについて学習内容が示されている。

一見するとかなり簡略化されているように見えるが、1ページ目に記述されているような「Purpose of Study（音楽科の学習目標）」と「Aims（目的）」はこれまでにはなかったものである。

(2) 第4次NCにおける創作領域

①創作領域の特徴

第4次NCでは、第3次NCまでのような書式で、明確に「知識、技能、理解（Knowledge, skills

8 <https://www.gov.uk/government/collections/national-curriculum> (2014.8.31アクセス確認)

9 DfE(2013), 「Statutory guidance National curriculum in England: framework for key stages 1 to 4」
<https://www.gov.uk/government/publications/national-curriculum-in-england-framework-for-key-stages-1-to-4/the-national-curriculum-in-england-framework-for-key-stages-1-to-4#programmes-of-study-and-attainment-targets> (2014.8.31アクセス確認)

and understanding)』や「発展 (Breath of study)」のような領域には分けられていない。また従来「知識, 技能, 理解」が「演奏技能 (Performing skills)」, 「作曲技能 (Composing skills)」, 「批評 (Appraising)」, 「聴取, 知識と理解の応用 (Listening, and applying knowledge and understanding)」の4つの分野に分けられていたような分類もなくなった。

「Subject content (教科内容)」で示されている創作に関わる記述は次に示す文言のみである。

まずキーステージ1では「相互関係にある音楽の特徴を用いて創造し, 選択し, つなぐ経験をする」と記している。次にキーステージ2ではまず「(生徒) は音楽的な作曲を理解することを発展させ, 音楽的な構造と聴覚記憶からの音の再生を用いてアイデアを組織し操作する」と記され, 次いで「相互関係にある音楽の特徴を使い, 目的の範囲に応じて音楽を即興演奏したり作曲したりする」と記されている。さらにキーステージ3では「即興演奏をし, 作曲する。そして音楽的構造, 様式, ジャンル, 伝統の範囲をカバーして音楽的アイデアを拡張し発展させる」と記されている。

これが第3次NCまでに示されていた「学習プログラム (Programme of study)」にあたる。その根拠は第3次, 第4次とも「Pupils should be taught to:」で始まるからである。

第4次NCでは, これまでのような詳細なプログラムや実例は示されなくなった。第1次NC及び第2次NCでは, 指導事例が紹介されていたが, 第3次ではほとんど紹介されていないことから考えると, その延長線上にあるとも考えられる。

しかし指導事例としてTES (think, educate, share) のホームページ¹⁰に指導用資料がアップされ, それを参照するように案内がある。そこでは指導事例の紹介を文書だけでなく, 動画でも行っている。したがって, 教師の裁量に任される部分が多くなったとはいえ, どのように指導すればよいのか戸惑う教師にとっては有益な情報となるといえる。

②創作領域の比較

次に示す表5は, 第1次NCから第4次NCまでの創作領域における学習内容に該当する部分を抜き出したものである。

表5 第1次NCから第4次NCまでに示された「音楽」の創作領域抜粋

第1次NC (1992)	第2次NC (1995)	第3次NC (1999)	第4次NC (2014)
キーステージ1の終わりには, 生徒たちは以下のことができるようになるべきである c)簡単な作曲をするために, 音を探し, 選び, つなぐ。 d)生徒自身が作曲したものを記録し, 互いに話し合う。	4 児童は次のような機会を与えられるべきである c いろいろな刺激に反応して作曲し, 能力の幅を広げる。例えば, 声, 楽器, 環境音 d 友達と音楽的なアイデアを交流する。	2 生徒はどのようにして次の方法を行うかについて教えられなくてはならない。 a 音楽的なパターンをつくる方法。 b 音や音楽的なアイデアを探究したり, 選択したり, まとめたりする方法。	相互関係にある音楽の特徴を用いて創造し, 選択し, つなぐ経験をする
キーステージ2の終わりには, 生徒たちは以下のことができるようになるべきである d)簡単な構造をもった音楽的なアイデアを考え, 発展させる。 e)音楽的アイデアを友達と話し合い, 記譜法を用いて作曲したものを記録する。	4 児童は次のような機会を与えられるべきである c いろいろな刺激に反応して作曲し, 能力の幅を広げる。例えば, 声, 楽器, 環境音 d 友達と音楽的なアイデアを交流する。	2 生徒はどのようにして次の方法を行うかについて教えられなくてはならない。 a 演奏の際に, 旋律的でリズム的な素材を即興し, 発展させる方法。 b 音楽的な構造の中で, 音楽的なアイデアを探究し, 選択し, 結合し, 組織化する方法。	(生徒) は音楽的な作曲を理解することを発展させ, 音楽的な構造と聴覚記憶からの音の再生を用いてアイデアを組織し操作する。相互関係にある音楽の特徴を使い, 目的の範囲に応じて音楽を即興演奏したり作曲したりする。
キーステージ1の終わりには, 生徒たちは以下のことができるようになるべきである d)音楽的構造をもった考えを発展させて, 音楽を作曲し, 編曲し, 即興する。 e)作曲したものを修正し, 後続の演奏のためにそれらを適切に記譜する。	c いろいろな刺激に反応して作曲し, 能力の幅を広げる。例えば, 声, 楽器, 環境音 d 友達と音楽的なアイデアを交流する。	2 生徒はどのようにして次の方法を行うかについて教えられなくてはならない。 a 演奏する際に, 音楽的アイデアを即興し, 探究し, 発展させる方法。 b 音楽的な構造や, あらかじめ与えられたジャンル, 様式, 伝統を含む素材を選択したり, 結合させたりして, 音楽的アイデアをつくり, 発展させ, 拡大する方法。	即興演奏をし, 作曲する。そして音楽的構造, 様式, ジャンル, 伝統の範囲をカバーして音楽的アイデアを拡張し発展させる。

(上段: キーステージ1, 中段: キーステージ2, 下段: キーステージ3)

10 http://community.tes.co.uk/national_curriculum_2014/b/music/default.aspx (2014.8.14 アクセス確認)

表5より創作領域では第1次NCから第4次NCまで共通していることが2つあることがわかる。

一つは、活動において「探究」「選択」が重視されていることである。それぞれのNCに示された文の中には「探究」に類似した言葉が用いられている。もう一つは「(音楽的な) アイデア」¹¹の重視である。それぞれのNCには必ず「(音楽的な) アイデア」という言葉が含まれている。つまり「(音楽的な) アイデア」が重視され、これを創作活動の出発点としていると考えられる。

6 結論

第4次NCでは教師に向けての学習内容の記述はなくなったとはいえ、探究活動に基づく学習であるという基本的な理念は継承されていることが明らかになった。すなわちNCにおける創作領域の特徴は、生徒による実験的な探究活動が重視され、その活動を進めるきっかけとなるものが「アイデア」であると考えられる。

この考えは1992年に第1次NCが発表されるよりも前にその原点があると推測される。それは1970年に出版されたジョン・ペインターとピーター・アストンの共著「Sound and Silence」¹²の影響である。その本の中でペインターは「経験創作 (empirical composition)」という概念を述べている。そこでは「いろいろな楽器や音楽的アイディア (ママ) などの素材にいきなり立ち向かい、即興演奏による実験をくりかえしながら音楽作品を作りあげていくというやり方である」と述べている¹³。NCに示された学習内容は、まさにこの「Sound and Silence」の考えと一致する。したがって英国イングランドにおける創作学習は、ペインターらの影響を受けて、今日に至るまで続いていると考えられる。

(注) 本文中の英訳はすべて筆者に責任がある。

参考文献

- 後藤 誠也 (1966), 「総合制中等学校 (I): イギリスにおけるエリート層選抜法批判と中等教育再編成の方向を主題に」, 『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第8巻, pp.225-258
- 塩原麻里, 高須 一 (2003), 「イギリス」, 『音楽のカリキュラムの改善に関する研究-諸外国の動向-』, 国立教育政策研究所 これはNC「音楽」1999年版の邦訳を掲載したものである。
- インターネットからも入手可能。http://www.nier.go.jp/kiso/kyouka/PDF/report_15.pdf
- 塩原麻里 (2003), 「イギリスの音楽教育における評価: NCを中心にして」, 『東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・健康・スポーツ科学』第55号, pp. 25-34
- 高須 一 (2002), 「英国の学校音楽教育における『作曲領域』の変遷 (I)」, 『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要XIV』, pp.79-94
- 高須 一 (2002), 「英国の学校音楽教育における『作曲領域』の変遷 (II)」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』第51号, pp.501-507
- 田中和美 (2005), 「2.8 The United Kingdom 英国」, 『ヨーロッパにおける日本語教育事情とCommon European Framework of Reference for Languages』, 国際交流基金, pp. 199-224
http://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/02-8.pdf
- 藤田弘之 (2005), 「2005年イギリス総選挙に関わる教育政策論争:各党マニフェストの分析を基礎とした労働党教育政策の検討」, 『滋賀大学教育学部紀要 I 教育科学』第55号, pp.49-82
- Department of Education and Science (1992), *Music in the National Curriculum (England)*, HMSO
- Department for Education (1995), *Music in the National Curriculum (England)*, HMSO

11 英国の音楽の授業では、音楽ではなく、まず音そのものとかかわりからそれを音楽へと発展させていく学習が示されている。そこに関わってくるのが音楽的アイデアである。

12 Paynter, J., Aston, J. (1970), 『Sound and Silence: Classroom Projects in Creative Music』, CUP

邦訳は山本文茂, 坪能由紀子, 橋都みどり訳 (1982), 『音楽の語るもの』, 音楽之友社

13 同上書 (邦訳), p.12

Department for Education and Employment (1999), *Music in the National Curriculum (England)*, HMSO

Fowler, W.S. (1990), *Implementing the National Curriculum: Policy and Practice of the 1988 Education Reform Act*, Kogan Page Ltd

Kelly, A.V. (1990), *The National Curriculum a critical review*, Paul Chapman Publishing Ltd.

(資料1) 第1次NC (1992年版) 創作分野抜粋

キーステージ1 到達目標1：演奏と作曲

キーステージ終了期における期待される技能	学習プログラム	実例
<p>キーステージ1の終わりには、生徒たちは以下のことができるようになるべきである</p> <p>c)簡単な作曲をするために、音を探し、選び、つなぐ。</p> <p>d)生徒自身が作曲したものを記録し、互いに話し合う。</p>	<p>生徒たちは次のようにするべきである。</p> <p>viii)自分たちの声、体、環境や調律楽器、非調律楽器からの音を含む音源の範囲を探究し用いる。</p> <p>ix)異なった刺激に答えて音をつくり、遊び、組織する。</p> <p>x)簡単な音楽的アイデアを話し合う。</p> <p>xi)作曲するときに、音楽的な音のための簡単なサインやシンボルを用い、理解する。</p> <p>xii)生徒自身の作曲したものを記録する。</p>	<p>生徒たちは次のようなことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室内楽器によってつくられた音を探究し、それぞれが作ることできた全く違った音がいくつかできたかを発見する。 ・声がつくることのできる音を探究する。 ・異なったエピソードを描写する異なったグループで、お話を音で述べる。 ・動きのパターンに合わせるために、音楽パターンを作り、それを他の生徒に教える。 ・生徒が作曲した作品のために簡単な図形楽譜を描く。 ・繰り返されるパターンを創案し、それを記録する。または録音するためにカセットテープレコーダーを用いる。

キーステージ2 到達目標1：演奏と作曲

キーステージ終了期における期待される技能	学習プログラム	実例
<p>キーステージ2の終わりには、生徒たちは以下のことができるようになるべきである</p> <p>d)簡単な構造をもった音楽的なアイデアを考え、発展させる。</p> <p>e)音楽的アイデアを友達と話し合い、記譜法を用いて作曲したものを記録する。</p>	<p>生徒たちは次のようにするべきである。</p> <p>ix)音源の広い範囲を探究し、用いる。</p> <p>x)完全に音楽的な形を作るために特定の音と音の組織を選ぶ。</p> <p>xi)即興、作曲、編曲を通して音楽的アイデアを発展させる。</p> <p>xii)適切な音楽的構造を使って、連続的な刺激に反応する音楽を作る。</p> <p>xiii)音色、音力、持続、場合によっては音高を定義する記譜法を通して音楽的アイデアを記録し話し合う。</p>	<p>生徒たちは次のようなことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作曲するときに、リコーダー、キーボード、コンピューター、電気的設備を用いる。 ・楽器で試す前に、視に基づいた作曲のための記述的な音を議論する。 ・ロンド形式 (ABACADA) もしくは与えられた「コーラス」と交互に変わる声の「節」に基づくクラス作品の中のソロ部分を即興する。 ・リズムパターン、動き、一連の絵、自然の痕跡を訪れたような直接経験に反応して作品を作る。 ・作品の図形楽譜を作る。 ・作品を他のグループに教える前に、それを考案するためにグループで活動する。

キーステージ3 到達目標1：演奏と作曲

キーステージ終了期における期待される技能	学習プログラム	実例
<p>キーステージ1の終わりには、生徒たちは以下のことができるようになるべきである</p> <p>d)音楽的構造をもった考えを発展させて、音楽を作曲し、編曲し、即興する。</p> <p>e)作曲したものを修正し、後続の演奏のためにそれらを適切に記譜する。</p>	<p>生徒たちは次のようにすべきである。</p> <p>xi)特別な機会のための音楽の作曲を含む、幅広い範囲の刺激に反応して音楽を作る。</p> <p>xii)個人またはグループで作曲・編曲するために、構造の中の音楽的アイデアを発展させる。</p> <p>xiii)広い範囲の音源をコントロールし、より洗練された楽器を使用できるようにする。</p> <p>xiv)様々な様式を用いて、声と器楽で即興演奏する。</p> <p>xv)完全な作曲をするために作品を改良する。</p> <p>xvi)伝統的な、または図形的な記譜法を含む複雑な記号、シンボル、指示を用い、理解する。</p> <p>xvii)幅広い範囲の合図、記号、シンボルと、録音のための技術を用いて、より複雑なアイデアを話し合う。</p>	<p>生徒たちは次のようなことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境的な主題で作品を作曲する。 ・中世英国の演劇の付随音楽を作曲する。 ・広告用のサウンドトラックを作曲する。 ・ダンス演技のために、異なったオスティナートやリズムオスティナートを試しながら作品を作曲する。 ・ガムランの様式と構造を使って、器楽作品を作曲する。 ・電気キーボードの音を合成する。 <ul style="list-style-type: none"> ・指揮者なしの演奏で、12小節以上のブルース構造のソロパートを即興する。 ・学級のための集団作品を演奏し、コメントを考慮しながら、最終の作曲作品を記譜する前に考えを発展させる。 ・図形的で／伝統的な記譜法を使って複雑な作品を記譜する。 ・作品を蓄積し、変え、再演するためにコンピュータを用い、楽譜を印刷する ・友達のための歌を、コード記号によって定義された伴奏で歌うために記譜する。

(資料2) 第2次NC(1995年版) 創作分野抜粋

キーステージ1 学習計画

音楽に対する児童の理解と享受は、「演奏と作曲」と「聴取と批評」の双方から要求される活動を通して発展するべきものである。

- 1 児童は次の機会を与えられるべきである。
 - a 音を用い、音楽に反応する。個人で、ペアで、グループで、クラスで。
 - b 音を録音するために、ITの適切な使用を行う。
- 2 演奏、作曲、聴取、批評時、児童は次の音楽の要素を、集中して聴き、発展させ、例えば頭で聴くように内在化させ、理解することを教えられなくてはならない。
 - a 音程 — 高い／低い
 - b 持続 — 長い／短い；パルスかビートか；リズム
 - c 強弱 — やかましい／静か／静寂
 - d 速さ — 速い／遅い
 - e 音色 — 音の質、例えばチリンチリン、ガタガタ、なめらか、リンリン
 - f テクスチャ — 複数の音を同時に／その音のみ演奏したり歌ったりする

そして上記の使用に次のものを含める。

 - g 構造 — 例えば楽曲の始め、中、終わりなどの異なった部分；例えば繰り返されるパターン、旋律、リズムなどの反復

3 演奏と聴取のために選ばれるレパートリーは、児童の音楽的経験と知識を伸ばし、我々の多様な文化遺産の豊かさについての認識を発展させなくてはならない。

そのためには次に示す様々な様式の音楽を含めるべきである。

- a 異なった時代や文化から
- b 過去と現在のよく知られている作曲家や演奏家による

〔演奏と作曲〕

4 児童は次のような機会を与えられるべきである	5 児童は次のことを教えられるべきである
c いろいろな刺激に反応して作曲し、能力の幅を広げる。 例えば、声、楽器、環境音	e 音楽的なパターンを即興する。例えば、遊んだり歌ったりしながらパターンを変える。
d 友達と音楽的なアイデアを交流する。	f 簡単な構造の音を探究し、創造し、選択し、組織化する。 g 音楽的な効果を創造するために音を用いる、例えば機械を想像させたり森の中を歩いたりしているように。 h 適切な時点で、記号を用いて、作曲したものを記録する。

キーステージ2 学習計画

音楽に対する児童の理解と享受は、「演奏と作曲」と「聴取と批評」の双方から要求される活動を通して発展するべきものである。

- 1 (略)
- 2 演奏、作曲、聴取、批評時、児童は次の音楽的要素を、詳細を注意深く聴き、音楽的なアイデアを確認し、探究し、例えば頭で聴いて内在化し、識別することを教えられなくてはならない。
 - a 音程 — 音程の漸次的変化、例えば上下移動、ステップと跳躍、C、G、D、ソのような音名。
 - b 持続 — 拍の集まり、例えば2拍子、3拍子、4拍子、5拍子。リズム
 - c 強弱 — 異なった音量。アクセント
 - d 速さ — 異なった速さ、例えば生き生き／静か、～よりも遅い／速い、
 - e 音色 — 異なった質、例えばけたたましい、柔らかい、うつろな、輝かしい
 - f テクスチャ — 異なった方法の音を一緒にならす、例えばリズムにリズムを重ねる、旋律と伴奏、組み合わせられたパート、音や和音の固まり
 そして上記の使用に次のものを含める。
 - g 構造 — 異なった方法で演奏される音は単純な形式で組織される。例えば、問いと答え、循環、フレーズ、反復、オスティナート（何回も繰り返される音楽的パターンである）、旋律
- 3 (略)

〔演奏と作曲〕

4 児童は次のような機会を与えられるべきである	5 児童は次のことを教えられるべきである
c いろいろな刺激に反応して作曲し、能力の幅を広げる。 例えば、声、楽器、環境音	e リズム的な、旋律的なアイデアを即興する。例えば打楽器パートに歌を加える。
d 友達と音楽的なアイデアを交流する。	f 音楽的な構造をもった音を探究し、創造し、選択し、結合させ、組織化する。例えば繰り返される部分、節、合唱 g 意図された効果を達成するために、音や構造を用いる。例えば、特殊な雰囲気を作り出すために。 h 適切な時点で、記譜法を用いて、作曲したものを洗練化し記録する。

キーステージ3 学習計画

音楽に対する児童の理解と享受は、「演奏と作曲」と「聴取と批評」の双方から要求される活動を通して発展するべきものである。

- 1 (略)
- 2 演奏、作曲、聴取、批評時、児童は次の音楽的要素についてそれ自身や相互の関係を理解しながら聴き、音楽的なアイデアの発展を確認し、探究し、内在化し、識別することを教えられなくてはならない。

- a 音程 — 様々な音階とモード，例えば長調，短調，ラーガ
- b 持続 — シンコペーション，リズム
- c 強弱 — 音量における微かな差異，例えばパート間のバランス
- d 速さ — 速さの微かな差異，例えばルバート
- e 音色 — 異なった方法で音色は変化する。例えばミュート，ボウイング／はじく，電氣的など。また異なった質で，例えば声や楽器の音色
- f テクスチャ — 楽器用法の密度と透明性，ポリフォニー，ハーモニー
そして上記の使用に次のものを含める。
- g 構造 — 例えばリフのように一つのアイデアに基づく形式，例えばロンドや三元のような交互に基づく形式，例えば変奏曲や即興曲のように発展する形式。

3 (略)

〔演奏と作曲〕

4 児童は次のような機会を与えられるべきである	5 児童は次のことを教えられるべきである
c いろいろな刺激に反応して作曲し，能力の幅を広げる。 例えば，声，楽器，環境音 d 友達と音楽的なアイデアを交流する。	e 様々な様式で即興したり編曲したりする。 f 素材を選択し，結合させる。そして音楽的な構造をもった音楽的なアイデアに発展させる。 g 様々な様式を，そしてまたは意図されたアイデアを達成するために音や慣例を用いる。例えば特別な行事のための音楽を作る。 h 適切な時点で，慣習的な五線による記譜法をふくめた記譜法と録音装置を用いて，作品を洗練化し完成させる。

到達目標 (Attainment Target)

キーステージ1

到達目標1：演奏と作曲

児童は音を探究し，選択し，秩序づける。単純な構造をもった曲を作曲し，強弱と音色を含めた音楽的要素のいくつかを用いて表現豊かにする。

キーステージ2

到達目標1：演奏と作曲

児童は適切な素材を選択し，結合する。音楽的な構造を用いる。音楽的要素と用いて表情豊かにする。計画された効果を達成する。

児童は演奏し，音楽的なアイデアを交流するときに記号を用いる。

キーステージ3

到達目標1：演奏と作曲

児童は音楽的なアイデアを構造の中で発展させる。ハーモニーを含めた異なったテクスチャを用いる。そして音楽的要素や様々な素材を利用する。

児童は特別な目的のために作曲し，記譜法を用いる。そして適切な時点で音楽的なアイデアを探究し，発展させ，修正するためにITを用いる。

例外的な演奏

到達目標1：演奏と作曲

児童は音楽的なアイデアを発展させ，構造を探究し，素材と話し合いの幅を探究する。

児童は適切な記譜法を用いて作品を洗練し完成させる。そして彼らの意図したことを確認し作業を終える。

(資料3) 第3次NC (1992年版) 創作分野抜粋

(1) 学習プログラム

キーステージ1

(A) 知識，技能，理解

指導に際しては，聴取，知識と理解の応用（筆者注：4つめの項目）は，演奏，作曲，批評の各技能（筆者注：

- 1 つめから3つめまでの項目)と関連づけて発展させられなくてはならない。
 音楽的なアイデアを創造したり発展させたりすること — 作曲技能
- 2 生徒はどのようにして次の方法を行うかについて教えられなくてはならない。
- a 音楽的なパターンをつくる方法。
 - b 音や音楽的なアイデアを探究したり、選択したり、まとめたりする方法。
- (B)さらなる学習の発展
- 5 キーステージ1の間、生徒は以下のことを通して知識、技能、理解を教えられなくてはならない。
- a 演奏、作曲、批評を統合化した音楽活動。
 - b 一定範囲の音楽的、非音楽的きっかけに反応すること。
 - c 個人、グループ、学級などの様々な形態での活動。
 - d 様々な時代そして文化の生演奏や録音された音楽。

キーステージ2

(A)知識、技能、理解

指導に際しては、聴取、知識と理解の応用(筆者注：4つめの項目)は、演奏、作曲、批評の各技能(筆者注：

- 1 つめから3つめまでの項目)と関連づけて発展させられなくてはならない。
 音楽的なアイデアを創造したり発展させたりすること — 作曲技能
- 2 生徒はどのようにして次の方法を行うかについて教えられなくてはならない。
- a 演奏の際に、旋律的でリズム的な素材を即興し、発展させる方法。
 - b 音楽的な構造の中で、音楽的なアイデアを探究し、選択し、結合し、組織化する方法。
- (B)さらなる学習の発展
- 5 キーステージ2の間、生徒は以下のことを通して知識、技能、理解を教えられなくてはならない。
- a 演奏、作曲、批評を統合化した音楽活動。
 - b 一定範囲の音楽的、非音楽的きっかけに反応すること。
 - c 個人、グループ、学級などの様々な形態での活動。
 - d 音を取り込んだり変えたり結合したりするためにICTを使用すること。
 - e 様々な時代や文化の生演奏や録音された音楽(例えば英国の各地の諸島からや、古典音楽、民俗音楽、ポピュラー音楽等のジャンルから、そしてよく知られた作曲家や演奏家によるもの等)。

キーステージ3

(A)知識、技能、理解

指導に際しては、聴取、知識と理解の応用(筆者注：4つめの項目)は、演奏、作曲、批評の各技能(筆者注：

- 1 つめから3つめまでの項目)と関連づけて発展させられなくてはならない。
 音楽的なアイデアを創造したり発展させること — 作曲技能
- 2 生徒はどのようにして次の方法を行うかについて教えられなくてはならない。
- a 演奏する際に、音楽的なアイデアを即興し、探究し、発展させる方法。
 - b 音楽的な構造や、あらかじめ与えられたジャンル、様式、伝統を含む素材を選択したり、結合させたりして、音楽的なアイデアをつくり、発展させ、拡大する方法。
- (B)さらなる学習の発展
- 5 キーステージ3の間、生徒は以下のことを通して知識、技能、理解を教えられなくてはならない。
- a 演奏、作曲、批評を統合化した音楽活動。
 - b 一定範囲の音楽的、非音楽的きっかけに反応すること。
 - c 個人、グループ、学級などの様々な形態での活動。
 - d 音を創造し、操作し、洗練するためにICTを使用すること。
 - e 様々な時代や文化の生演奏や録音された音楽(例えば英国の各地の諸島からや、「西洋古典音楽」、民俗音楽、ジャズ、ポピュラー音楽等のジャンルから、そしてよく知られた作曲家や演奏家によるもの等)。

(2) 到達目標

レベル1

生徒はあらかじめきっかけとして与えられたアイデアへ応答する形で、短いリズムや旋律のパターンを反復し、音をつくったり選んだりする。

レベル2

あらかじめきっかけとして与えられたアイデアへ応答する形で、音を注意深く選択しながら、それらを初め、中、終わりという簡単な構造にまとめる。

レベル3

生徒は繰り返しのパターンを即興する。そして音が組み合わされる効果を意識しながらいくつかの音を重ね合わせる。

レベル4

生徒は旋律的でリズム的なフレーズをグループの演奏として即興し、音楽的な構造の中でアイデアを発展させることで作曲する。

レベル5

生徒は旋律的でリズム的な素材を、与えられた構造の中で即興する。また、生徒は、様々な楽譜を使ったり、旋律、リズム、和音、構造といった適切な音楽的工夫を用いたりして、様々な機会にふさわしい曲を作曲する。

レベル6

生徒は、和声的、非和声的な工夫を使いながら、様々なジャンルや様式で即興し、作曲する。ここでは音楽的なアイデアを関連づけたり、継続させたり発展させたりし、意図された様々な効果を達成する。

レベル7

生徒は、自己に内在している音の感覚により、一貫した作品を創造する。そして与えられた音楽的な構造やジャンル、様式、伝統的な作品の中で、音楽的なアイデアを適合させたり即興したり発展拡大させたり、あるいは捨てたりする。

レベル8

生徒は旋律的でリズム的なフレーズと形式全体の中で、音楽の方向性や輪郭に関する感覚をもちながら、さらに広範囲にわたる音楽を演奏したり即興したり作曲したりする。

発展レベル

生徒は音楽的なアイデアの一貫した発展や、様式の一貫性を示すような、そしてある程度の個性を示すような作品を作曲する。

(資料4) 第4次NC(2014年版) 創作分野抜粋

本文中に示したため省略する。

